

大學博士從五位下刀利康嗣 一首【年八十一】

五言侍^スレ^ニ宴

嘉辰光華節
淑氣風自春
金堤拂^ヒ弱柳^ヲ
玉沼泛^フ輕鱗^ニ
爰降豐宮宴
廣垂柏梁仁
八音寥亮^{トシツク}奏^シ
百味馨香陳^ル
日落松影闇
風和花氣新^{ナリ}
俯仰一人德
唯壽萬歲眞

侍宴、嘉辰、淑景、宮中春色爛漫の時、御宴を設け羣臣を會する。弱柳は新柳なり。枝垂柳なり。輕鱗は水上に浮ぶ小魚なり。共に外景。豐宮宴、漢の高祖は豐沛の人、即位して其の民を復す。後人因て帝王の故郷を豐沛と爲す。漢の武帝は羣臣と柏梁臺に會し、宴を開き以て詩を賦す。八音は八ツの鳴り物、金と石と絲と竹と匏と土と革と木となり。種種の鳴器を奏するなり。百味馨香陳、饌に上るもの、皆美珍なるを謂ふ。日落の文字は不祥なるも、作者は氣が付かざりしなり。單に日暮まで宴に侍したるを言ふのみ。一人は天子を云ふ。羣臣皆天子萬歲を稱て以て其の徳を頌す。是れ眞實にして虚假にあらざるなり。

皇太子學士從五位下伊與部馬養 一首【年四十五】

五言從_レ駕應_レ詔

堯帝叶_二仁智_一
仙蹕玩_二山川_一
疊嶺杳不_レ極
驚波斷_レ復連
雨晴雲卷_レ蘿_一
霧盡_{キテ}峯舒_レ蓮
舞_レ庭落_二夏槿_一
歌_レ林驚_{カス}秋蟬_一
仙槎泛_ハ榮光_一
鳳笙帶_二祥煙_一
豈獨瑶池_一上
方唱白雲篇

從_レ駕、天皇行幸、隨駕して作る。蹕の本義、君王行幸の道路を警戒して、行人を停めるに在る。轉化して御輿の意味に用ふ、疊嶺の五字、山の景を謂ふ。驚波の五字、水の景を謂ふ。雨晴れるが故に雲が蘿を卷くなり、霧盡れたるが故に峯が蓮を舒べたるなり。而して庭上に舞ひ落たるものは夏の槿なり、詩成りて林に向つて歌ふ。其の聲に秋蟬は驚くなり。仙槎は御舟と見るべし。水上の景色。鳳笙は船中にて笙を吹く。其の聲祥煙を帶ぶ。瑶池、昔穆王は王母と瑶池上に宴したることを詫るが、今日の會も同じきものなり。獨穆王のみにあらず。白雲篇は佳詩を謂ふ。

從四位下播磨守太石王 一首【年五十七】

五言侍宴應詔

淑氣浮高閣、
梅花灼景春、
叡睠留金堤、
神澤施羣臣、
琴瑟設仙籟、
文酒啓水濱、
叨奉無限壽、
俱頌皇恩均。

淑氣は和氣、春の人に可なる氣分を言ふ。睠は眷と同義、睠顧、睠戀、と用ふ。天子なるが故に叡睠と用ふ、金堤は堤の奇麗なるを言ふのみならず、堤の堅固なるを意味するなり。神の字は上の叡の字に對す、恩澤なり。羣臣一様に恩澤を蒙むる。琴瑟、設仙籟、琴を弾じ、瑟を鼓する所は何ぞ、是れ則ち仙籟所謂下民の行を得ざる禁苑に設く。文章を作り、酒を飲むは、水濱に於てす。叨、自分の分際を超えてと云ふ謙辭に用ふ。天皇の爲めに萬歳を唱うて、以て皇恩の平等に私無きを頌し奉るとなり。

大學博士田邊史百枝 一首

五言春苑應應_レ詔_二

聖情敦_シ汎_二愛_一
神功亦難_シ陳_ハ
唐鳳翔_リ臺_二下_一
周魚躍_ル水濱_二
松風韻添_レ詠
梅花薰帶_フ身_二
琴酒開_キ芳苑_二
丹黑點_ス英人_二
適_マ遇_二上林_一會_二
忝壽_ス萬年_一春_一

春日御宴に侍しての作。聖天子の情は汎愛にして私愛にはあらず。神功も簡短には陳言し難い。唐鳳は堯代の鳳凰は聖人の爲め臺下に翱翔す。李唐にはあらず。周魚、周の上古は仁愛深くして、殘虐の事無し、魚も亦水に樂しむ。松風の清韻は、詩詠を添ふべし。梅花の香薰は、滿身に帯ぶべし。而して琴と酒と、芳苑は賑はし。丹【畫のこと】墨と【書のこと】との英人、即ち「スグレタ人」が點筆する。漢代の上林會、即ち今日の會是れなり。

從四位下兵部卿大神朝臣安麻呂 一首【年五十乙】

五言山齋言志

欲_レ知_二閒居_一趣_二
來_リ尋_ヌ山水_一幽_{ナル}
浮沈煙雲外
攀翫野花秋
稻葉負_テ霜落
蟬聲逐_テ吹流_{カセテ}
祇爲_ス仁智賞_ヲ
何論_セ朝市遊_ヲ

閒居趣、山齋と雖も決して隱遁者の山齋にはあらず。靜を愛するが爲めの山齋なり。浮沈は出沒の意味と見るべし。山水の間に遊べば、煙雲の外に出沒するは當然なり。而して攀翫するは野花秋なり。攀の字「ノボル」の意味にあらず、賞翫する意味なり。稻葉負霜落、落は凋_むの意味に見よ。蟬聲逐吹流、流は衰期の意味。此の如き秋晩の景色は、只仁者や智者の賞するのみ。朝市の遊即ち絲竹の遊は、今論ずる所にあらず。山齋自然の遊は、人間有意の樂に勝るとなり。

從三位左大辨石川朝臣石足 一首【年六十三】

五言春苑應レ詔

聖、衿、愛、良、節、
仁、趣、動、芳、春、
素、庭、滿、英、才、
紫、閣、引、雅、人、
水、清、瑤、池、深、
花、開、禁、苑、新、
戲、鳥、隨、波、散、
仙、舟、逐、石、巡、
舞、袖、留、翔、鶴、
歌、聲、落、梁、塵、
今、日、足、忘、德、
勿、言、唐、帝、民、

聖衿は聖主衿懷と成語す。天皇が良節を愛し玉ふ御懷おんおもひなり。仁趣動芳春、天
皇の仁、此の芳春に遇ふ。羣臣を會して共に宴せんとの趣を發し玉ふなり。素庭
は未檢出典。考ふるに宮庭は無塵の地なれば、以て之を稱したるなるべし。紫庭、
彤庭、は多く使用す。素庭は未見。滿英才、才學の臣の多きを言ふ。紫閣は宮中。
雅人は正雅人。水清きが故に、戲鳥散ずるなり。水深きが故に仙舟巡るなり。舞
袖留翔鶴、席興を扶ける妓女等の歌舞の巧妙なるを謂ふ。歌聲は非情の類まで感
じさせるを以て、歌ふ毎に梁上の塵が落ちるとなり。歌聲の美なるに感じて梁塵
が落つるなり。忘德、徳は記するが普通になるに忘ると言は何ぞ。徳を記しては
無爲にあらず、徳を忘るゝが無爲の功なり。堯の世即ち唐帝民は帝徳を忘る。忘
れて以て眞の無爲而化の理が顯はるゝなり。何ぞ是を唐帝の民とのみ言はん。今

日も亦是れなりと嘆ずる意味なり。

從四位下刑部卿山前王 一首

五言侍^ス宴^ニ

至^ニ德^ク洽^ク乾^ニ坤^ニ
清^ニ化^{ナリ}朗^{ナリ}嘉^ニ辰^ニ
四^ニ海^ニ既^ニ無^{ナリ}爲^{ナリ}
九^ニ域^ニ正^{マサニ}清^ニ淳^ニ
元^ニ首^シ壽^シ千^ニ歲^ヲ
股^ニ肱^ニ頌^ニ三^ヲ春^ヲ
優^ニ優^ニ沐^{スル}恩^ニ者^ニ
誰^ニ不^レ仰^ニ芳^ニ塵^ヲ

山前王は忍^{をまかへ}壁親王の子。

至^ニ德^クは大^ニ德^クなり。乾^ニ坤^ニに充^レ洽^セせり。清^ニ明^クの化^ニ育^ニ。嘉^ニ辰^クは多^ク元^ニ旦^ニに用^フふ、其^ノの
他^ニ用^フひず。四^ニ海^ニ既^ニ爲^ス無^ク、九^ニ域^ニ正^ニ清^ニ淳^ニ、四^ニ海^ニも天^ニ下^ニ、九^ニ域^ニも天^ニ下^ニ、天^ニ下^ニは無^ク爲^スなり、
天^ニ下^ニは清^ニ淳^ニなり。元^ニ首^ニは天^ニ皇^ニ、股^ニ肱^ニは羣^ニ臣^ニ、聖^ニ壽^ニは長^クかれと祈^ル。正^ニ月^ニの始^ニめに
於^テ、三^ニ春^ニの嘉^ニ辰^ニを頌^スす。優^ニ優^ニゆつたりと皇^ニ恩^ニに沐^シし、且^ニ侍^ニ宴^ニの榮^ニを荷^フふ者^ニ、誰^ニ
が芳^ニ塵^ニを敬^レ仰^セせざる者^ニあるや。

正五位上近江守采女朝臣比良夫 一首【年五十】

五言春日侍宴應詔

論^{スレバ}道^ヲ與^ト唐^ト 儕^{ヒトシ}
語^{レハ}德^ヲ共^ト 虞^ト 鄰^{トナル}
冠^{タリ}周^ヲ 埋^ム尸^ヲ 愛^ニ
駕^ス殷^ヲ 解^ク網^ヲ 仁^ニ
淑^ニ景^ニ蒼^ニ天^ニ麗^{シク}
嘉^ニ氣^ニ碧^ニ空^ニ陳^{ナル}
葉^ハ綠^{ナリ} 園^ニ柳^ニ月^ニ
花^ハ紅^{ナリ} 山^ニ櫻^ニ春^ニ
雲^ニ間^ニ頌^シ皇^ニ澤^ニ
日^ハ下^ニ沐^ス芳^ニ塵^ニ
宜^ク下^ニ獻^{シテ}南^ニ山^ニ壽^ヲ
千^ニ秋^ニ衛^{マモル}北^ニ辰^ヲ

唐、虞、殷、周の四朝は、所謂道と徳と愛と仁とを良とに圓滿に遂行せし時代なり。而かも其の末は殘虐の王出でたるを以て、民心離れ國遂に亡びる。今は其の上世の善政時代を譬に持ち來りて、頌を奉るなり。埋尸愛、未檢。解網仁、殷の湯王出て見る、網を四面に張り而して之を祝する者あるを。曰く天より降り、地より出で、四方より來る者は、皆吾が網に罹れと。湯の曰く、嘻之を盡くせりと。乃ち其の三面を解て改め祝して曰く、左せんと欲せば左せよ、右せんと欲せば右せよ、命を用ひざる者は吾が網に入れと。諸侯之を聞いて曰く、湯の徳至れり、禽獸に及ぶと。今の天皇は其れ以上の仁であるなり。淑景は春景なり、嘉氣は春氣なり。蒼天も碧空も意義同じ。山には紅櫻あり、園には綠柳あり。雲間頌皇澤、日下沐芳塵、聖天子に咫尺して其の恩澤を頌讚し、其の芳塵に沐浴すとなり。雲

間と日下は天子の咫尺を言ふ。南山壽、天子の爲め萬壽を祈り、而して北辰即ち天子の御座所を衛護せざるべからず。徹頭徹尾、天皇の大徳を頌讚しての詩なり。